

キャリア形成上の偶発的契機とその受容

走井 洋一

(平成 24 年 12 月 20 日査読受理日)

To accept accidental opportunities in career development

HASHIRII, Yoichi

(Accepted for publication 20 December 2012)

キーワード：キャリア形成，キャリア教育，偶発的契機，自己形成

Key words : Career development, Career education, accidental opportunities, Self development

問題の所在

本論文は、キャリアがいかにして形成するのかについての見通しを見出すこと、より具体的には、キャリア形成上の困難を抱えた人たちがその困難をどのようにして受容していく(=困難を認識し、それを自分のなかに位置づけつつ、社会的な位置を確認していく)のかを解明することを通じて、私たちが暗黙裡にキャリアを形成しているプロセスを記述することを目指している。もちろん、キャリアが「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出し、く連なりや積み重ね」[中教審, 2011]であるかぎり、キャリアを形成するプロセスは、それぞれの人が見出し、形づくっていくものであることは否定しがたい。そのため、キャリア形成のプロセスにおいて困難を経験していないとするものもありうるだろうし、自らが経験する困難とキャリア形成上で困難を抱えた人たちのそれとは異なるという指摘もありうるだろう。しかし、ここで意図しているのは、無自覚のうちに生起している困難の認識と受容を明るみに出すことで、キャリア形成研究のなかでこれまであまり考慮されてこなかった点に言及することが可能となるだろう。

以下では、キャリア形成上の困難を解明するために、まず O. F. ボルノーに従って人間形成上の困難がどのような性格を有しているのかを確認する(I)。そして、ボルノーによれば誰しもに生じるはずの人間形成上の困難がなぜある人には困難として生起して、別の人には困難として生起しないのかについて考える(II)。そして、最後にそうした困難を受容するとはそもそもどのような事態であるのか、そしてそれを促していくにはどうすればよいのかについて一定の見通しを示すこととしたい(III)。

I 人間形成上の困難とその特徴

そもそもキャリア形成上の困難はどのようにして生起す

るのだろうか。キャリア形成を人間形成の一様態と捉えるならば、ボルノー [1959] が指摘したように、こうした困難は連続的な形成プロセスに生じる非連続的形式とみなすことができる。

ボルノーはこうした非連続的形式として、危機 (Krise)、覚醒 (Erweckung)、訓戒 (Ermahnung)、助言 (Beratung)、出会い (Begegnung)、冒険 (Wagnis)、挫折 (Scheitern) をあげているが、訓戒や助言、出会い、冒険、挫折が教育上生じる事態であるのに対して、危機と覚醒は人間形成上の事態として捉えられている¹⁾。これらのうち、私たちの課題であるキャリア形成上生起する困難は人間形成上の困難であることから危機として現れてくるとみてよいだろう²⁾。ボルノーはこうした危機の特徴として、①その出来事が連続的経過を中断するという非連続性を有していること、②その中断がその出来事を経験した人にとって「新たな生」を生み出す決定的な意味をもつものとなること、③その出来事が突如として現れること——ここには当人の意図せざるものであることと外からもたらされることが含意されている——をあげている。例えば、病気になるという事態は、それまでの健康な状態から突然に起こる異なった状態への転換を意味するが、本人が望んで病気になるのではなく、唐突に自己に生起する事態である。つまり、その病気は自己に起因しないものである³⁾。それだけでなく、自己に外から突発的にふりかかってくるものにほかならない⁴⁾。このようなかたちで自己にふりかかってくる病気は健康な状態という連続的なプロセスを断絶させ、まったく異なった時間へと私たちを誘引する。このことを彼は「時間離脱的な性格 (der zeitentrückte Charakter)」あるいは永遠性としているが、これは危機の根本的な性格を表しているといつてよい。この危機の時間離脱的性格、あるいは永遠性は、一方では病気はいつ治癒するのかかわからないという感覚を私たちに与え、時間感覚を奪うものである⁵⁾。他方で、この永遠性についてボルノーは宗教的概念としての覚醒として言及している。つまり、こうした

覚醒は、「……人はその究極の深みにまで変化し、生まれ変わったと感ずること」[Bollnow, 1959, p.50]ができるものである。つまり、こうした契機は私たちにとって苦しいものでありながらも、その苦しみを通じて新たな生をもたらすという積極的な意味も見出すことができる。だからこそ、先の病気の例に戻れば、病気が治癒し回復したときの健康な状態は、病気以前の健康とは異なったものとなるはずである。

このようにボルノーは危機という事態にいくつかの特徴を見出しているが、こうした非連続的契機——困難——は私たちの生を脅かすものでありながら、「邪魔をする何かとして捉えてはならない」[Bollnow, 1959, p.41]、つまり、私たちは本来的な自己へといたる契機としてそれらを受容する必要があることも指摘している⁶⁾。つまり、こうした非連続的契機が人間形成上の事態として誰しにも生じるものであるということである。だとすれば、私たちにとってこうした非連続的契機のすべてが同じような困難として生起するはずであるが、私たちは必ずしも同じ困難としては受け取ってはいない⁷⁾。なぜこのような事態が生じるのかを次に考える。

II 困難はなぜ困難となるのか？

さて、このような特徴をもつ危機が私たちにふりかかってくるとしても、なぜある人には受容困難なものであり、別の人には受容可能な事態として生起するのだろうか⁸⁾。これにはいくつかの見方が考えられるが、ここでは2つあげておきたい。第1に危機に陥ったとしても、資源の多寡によってそれを受容できるかどうかの結果が左右されるという問題、第2に自己と身体との解離によって生起する問題、である。

第1の問題は、後期近代社会の特徴としてU.ベック[1986=1998]が指摘したように、危機をも私たちの自己責任に帰するという背景がある⁹⁾。つまり、危機が個人を原因として生じるため、その危機を個人が引き受けなければならぬとする見方である。こうした考え方が浸透した社会では危機を個人が引き受けざるをえないが、その個人がもっている物的、人的な資源(社会関係資本、例えば、経済的な資源や人的ネットワーク、など)が緩衝材(バッファ)となっているという事実を看過しがちである¹⁰⁾。つまり、危機を個人が引き受けているように見えながら、その内実はその個人を支えるバッファがその危機の度合いを低めている(ないしは無にしている)のである。だとすると、同じ事態であっても、そうしたバッファの多寡によって大きな困難となる人と困難とすら認識されない人とが生まれることが十分に予想される。実際、キャリア形成上の困難は移行期に生じることが多いが、移行期における個人化(=人的なバッファの消失ないしは当初からの不在)が移行の

さらなる困難化を助長することがあると指摘されている¹¹⁾。

キャリア形成は確かに自己において生起する事態であるため、そこで生じる偶発的契機もまた他者や社会から独立した自己——他者や社会から独立して自己が存在するというこうした見方を「閉じた自己」とする——において生起する事態としてこれまで受け取られてきた。しかし、偶発的契機が生じる自己は他者や社会から独立しているわけではなく、それらとのかかわりのなかで存在するものである。先に確認したように、偶発的契機は外から意図せずにはふりかかってくるものではあるが、自己と他者や社会という関係において生起するものであるため、別言すれば、自己と他者や社会とのかかわりにおいて生じるはずがバッファの有り様を変化させることで、特定の時期・状況において降りかかってくる偶発的契機の困難さの有無や度合いを変化させることになると考えられる。それゆえ、こうした偶発的契機が誰しにも生起すること、ただそれが私たちにふりかかってくるときには困難となってしまう人がいる一方で、バッファの機能によって困難として発現することがない人もいること、が明らかになったといっていよう。

第2の問題は少し複雑である。先に確認したように、危機は私たちからは生じないが、私たちに認知される。ここで私たちの認知が焦点化される。認知一般についての確定的な説が見出されたわけではないが、私たちの認知は基本的に身体と切り離されることがないことは同意されるだろう¹²⁾。ただ、A.ギデنز[1991=2005, pp.60-69]が指摘するように、身体のコントロールは継続的なモニタリングによって獲得されるのだが、それがうまくいかず、あるいは何らかの契機によって自己と身体とが分断されてしまい、身体化されない(=身体が背後にいる自己によって操作される対象や道具になっている)状態に陥ることがある。こうした状態に陥った人は「危険をまるで他人への脅威であるように経験する」ことになる。ここでギデنزが用いているのは「危険」であって、ここまでボルノーに依拠して論じてきた「危機」と同一ではない。しかし、私たちがこうした(身体的な)危険を避けるよう行動する傾向性を有していること、そしてまた、そのことが自己と身体との分断をもたらすことを確認できるだろう。

ここにキャリア形成を考えていく際の難点が生起している。というのも、キャリア形成が自己において生起するものであることは誰もが同意するところであろうが、しかしそれが認知において生じるのか、身体において生じるのかという点では必ずしも同意を得ていないからである。つまり、キャリア形成上の困難は認知の仕方によって受容することが可能だという見方が成り立つからである。ギデنزが身体への物理的な危険を脱することができるかもしれないが、「別種の強度の不安」に陥ってしまうとも指摘する[Giddens, 1991=2005, p.64]。これは身体的な危険が自己

への不安をもたらすことを示しているが、ということは、私たちがいとも簡単にキャリアを形成しているプロセスは、こうした身体的な危険を認知することなく、そのまま自己のうちに取り込むことを成し遂げているとも捉えられるだろう。

ところで、こうした身体のコントロールは経験の蓄積のなかで獲得されるものであって、「言葉で言えない」ものの中心的側面であるため、困難を困難と認識(≠認知)する前に適切な行動を引き出すことができる¹³⁾。しかし、困難を抱えた人たちのなかには自己の身体感覚を喪失した状態に陥ってしまい、その結果、身体から遊離した自己完結的な思考が引き起こされ¹⁴⁾、受容困難な事態となることがありうるのである。

身体感覚は「私たちが語ることができるもの(または、有意味に語ることができるもの)にとって必要な枠組み」[Giddens, 1991=2005, p.61]であるため、身体感覚を喪失するということは「語ること」を失うことにも通じている¹⁵⁾。とはいうものの、私たちは「言葉を用いること」ができるため「語ること」を失うというのは奇異に感じるかもしれない。しかし、「語ること」には身体感覚の裏づけが必要となる¹⁶⁾。というのも、私たちの活動は環境とのリアルなかかわり(≡文脈、状況)のなかで生起するものだからである。そのため、「語ること」は文脈においてのみ成立する営みだといえるだろう¹⁷⁾。

III 困難の受容——二重の自己変容

それでは、こうした困難を私たちはどのように受容しているのだろうか。ここでいう受容とは、その困難を自己において引き受けて、ボルノーのいうところの「新たな生」を開くことを意味している。もちろん、困難の受容は一樣でないため、それを単一のフレームワークで論じることの危険性を承知しつつも、1つの見通しを示したい。

先に困難が困難として顕在化する背景を、①バッファの弱体化ないしは消失、不在、②自己と身体との解離をあげたが、ギデンズ[1991=2005, pp.39-49]によれば、身体性の獲得はいわゆる「基本的信頼」¹⁸⁾を基礎としているため、①の問題の結果、②の問題が生起するといえる。そのため、究極的には自己の問題として困難の受容を考えることができる¹⁹⁾。

自己が他者や社会とのかかわりと断絶した閉じた自己ではないとすれば、他者や社会とのかかわり、つまり文脈においてあるという側面を指摘できるはずである[走井, 2011]。上田[2000, p.24]はこうした「私」²⁰⁾を「私は、私ならずして(私なくして)、私である」と端的にかつ必要十分に表現する²¹⁾。つまり、「私」とは、①「私は私である」という方向と、②「私は私ではない」という方向の結節する場に生起する運動にほかならない。「私は私であ

る」というのは自己同一的な表現として受け取られるが、ここに執着すると自閉的な自己の在り方へと墮してしまう。そのため、自己に閉じようとする傾向を「私ならずして」というように否定して、他者とともにある場所に開かれる必要がある。①の方向に執着すれば、自己執着、ないしは自意識過剰となりうるし、②の方向が強くなってしまえば、自己喪失の状態になってしまう。それゆえ、①、②の二方向の運動として、あるいは不安定な両義性として、「私」は生起しているのである²²⁾。

こうした自己概念のもとでキャリア形成上の困難を位置づけた場合、「私」の歪みという事態として受け取ることができる。歪みは①、②どちらの方向に傾くこともありうるだろう。ただ、こうした不安定な両義性が「私」の本質であるとすれば、私たちのすべてがこの均衡を保てなくなることも指摘しておかなくてはならない。もちろん、多くの場合、バッファの存在によって顕在化しないか、あるいは顕在化してもなんとか受容できる程度で収まるだろう。しかし、バッファが弱体化(ないしは消失)していれば、どちらかの方向への傾きが無制約的に増幅されることになる。このようにして困難が受容しがたいものになっていくと考えられる。このことを裏づけるように、若者自立塾の受講生の「……自分の中で思い込んでいたことが覆されて、ああいんだなぁと思った」[大高, 2011, p.92]という言葉には、「私」への自閉的な傾向(「思い込んでいた」)が困難な状態を生み出してたことと、その傾向を否定して(「覆されて」)、自己の歪みを回復する(「ああいんだなぁ」)プロセスが透徹されている。

このことから、偶発的契機の受容には自己認識の変容が必要であることが明らかとなる。ただ、ここでの自己認識の変容は、まず①他者や社会とのかかわりにおける自己の変容を前提としていること²³⁾、そして②その自己の変容を受け入れて、自己認識を変容すること²⁴⁾、の2つの段階、ないしは2つの側面において生起している点にも注意が必要である。つまり、この言葉から読み取ることができるのは、まず自己認識からはズレた自己の変容が生起し、それをうまく受け入れることができない状態(「思い込んでいた」という認識)が生じるが、それが「覆されて」自己認識の変容が生じたということである。そして、この2つの側面において生起する自己認識の変容が「閉じた自己」においてではなく、他者や社会とのかかわりのなかで生起することは先にも指摘したとおりである。ただこの点がキャリア形成支援、あるいはキャリア教育のあり方を難しくしているのだが、キャリア形成はどこまでいっても自己において生起することがらであるにもかかわらず、その自己が他者や社会とのかかわりのなかで存在しているということ、つまり、自己がそれらとのかかわりを排除しては成立しないという基本的な事実の再確認がここでは必要になったと

いってよいだろう。それゆえ、キャリア形成は自己が他者や社会とのかかわりにおける自己変容とそれに伴う自己認識の変容を遂げていくプロセスであるため、他者や社会がどのような状況にあるのか、より正確には自己をとりまくバッファがどのような状況にあるのかが、自己の変容のみならず、その自己認識の変容にとって大きなファクターを占めることになるのである。つまり、バッファの有無や強弱によって、自己の変容を要請する偶発的契機が深刻なものとなるかどうか左右されるだけでなく、その自己認識の変容を促すか否か、あるいは妨げるか否かを決定する要因ともなりうるということである。

それではこのような自己の変容はどのようにしてもたらされるのだろうか。上田 [2000, p.38] は「私」の回復はどこかで決定的に「自分で」ということがあってはじめて、「私」の回復である」という。つまり、究極的には困難がふりかかってきた「自分で」行うしかないということである。しかし、ここでいわれる「自分で」は、自己の思考においてではなく、自己の身体においてという意味で捉える必要がある。「私的には、すごく働くことが怖かったんで、ハローワークって1回も行ってなかったんですね。……だけど、ハローワークに1回連れて行って貰うと、そんなに怖がらなくてもいいのかなってことを思ったんで、それから結構普通に行けるようになった」[大高, 2011, p.92]という若者自立塾の受講生の言葉には、自己の思考において生じた歪みが身体によって回復されるプロセスを見出すことができる。しかし、回復のプロセスは個人化を促すものではなく、この言葉に表れているように身体感覚を背景とした協同的な営み（「連れて行って貰う」）として行われていることにも私たちは注意を向けるべきであろう。つまり、仮に難なく困難を受容しているように見える人であっても、それはこうした協同的な営みのうえに困難の受容が成立しているということなのである。

このことは、先に指摘した思考と身体の解離という事態の回復をはかることにほかならないが、ただ、ここで注意すべきなのは、こうした自己認識の変容への支援が必ずしも文字や思考など記号を前提とした形式知のみからもたらされるわけではないということである。よりの確に表現するならば、身体的な働きかけが必要であるということである。といっても、何らかの作業を強制するというのではなく、自己認識を身体において生起させるような支援を必要としているということである。偶発的契機をうまく受容できない人たちにおいて生起していたのは、まず他者や社会とのかかわりにおける自己変容がうまく生起しないこと、そしてその自己変容をうまく自己認識できないことであったが、それは自己の身体と思考とのズレを架橋できない事態として受け取ることができる。つまり、まず、自己は他者や社会とのかかわりのなかで変容を余儀なくされるが、

その際にそうしたかかわりのなかでの自己の振舞いを最適化できないというかたちで自己変容がうまくいかない事態が生じるのである。そして、自己が他者や社会とのかかわりのなかで変容をしたとしても、その現実を適切に受け入れることができないという事態が生じる。このどちらも、自己の身体と思考とのズレから生じているといえるだろう。前者については、他者や社会とのかかわりの認知（＝思考）とそこでの振舞い（＝身体）との間のズレとして、後者においては、自己の変容（＝身体）とその認識（＝思考）との間のズレとして生起しているからである。それゆえ、身体的な働きかけを通じて、身体と思考とのズレの解消が目指される必要がある。

おわりに——今後の課題

本論文では、キャリア形成上で生じる困難をいかに受容するのかを検討することを通じて、個々人の諸能力とそれを具体的な文脈において形成するキャリアにおいてどのように組み込んで行くかということを検討してきた。ただ、これはかなりラフな見通しを示すにとどまっているということは否定できない。例えば、上田閑照の自己観にもとづきつつ自己の歪みを示したが、そもそも上田が示す自己観の妥当性については十分に吟味しておらず、その点はさらなる検討を必要としていることを指摘しておきたい。

また、最後に明らかになった支援の仕方は、例えば、しんじゅく若者サポートステーションで現在実施されている「若年無業者のためのパソコン講座——「人っていいなプロジェクト」」のワークショップにその可能性を見出すことができる²⁵⁾。そのワークショップでは自己を身体的に表出し（＝演じ）、それを再度自己に取り込む（＝観る）ことを通じて自己認識の変容を最適化するプログラムを提供しようとしている。今後、この取り組みにアクションリサーチ的に関与しつつ、ここで明らかになったキャリア形成のプロセスを検証するとともに、キャリア形成支援の在り方を模索していきたいと考えている。

註

- 1) おそらくここで、出会いや冒険、挫折もまた人間形成上の問題として生起するのではいかという疑問がありうるが、ボルノーはこれらを教育上の事態として捉えているので、この妥当性についてはさしあたって踏み込まない。
- 2) 覚醒もまた人間形成上生起するものではあるが、危機と本質的な差異がないものとして扱っていること、またここで考えようとしているキャリア形成上の困難として立ち現れるのが覚醒ではなく危機であることから、危機に焦点化することにする。
- 3) この見解に、医学の進歩した時代を生きる私たちは病

気もまた自己の生活に起因すると認識し、異議を唱えるかもしれない。しかし、生活のすべてが自己によって操作可能であるとする見方にはそもそも同意できないことから考えて、この異議は棄却されるべきものである。

- 4) ここでもこのような反論がありうるかもしれない、「本人が他者へのかかわり方を誤ったために彼/彼女に危機が訪れることもあるではないか」と。しかし、それに対しては「そうしたかかわり方を受容しうる関係において行われたとすればどうだろうか」と再反論し、後に述べられるバッファを暗示しておくだけで十分であろう。
- 5) この点で示唆的であるのは、A.ギデンズの次の言葉である。すなわち、「時間がばらばらな瞬間として理解されることがある。このとき、それぞれの瞬間は先立つ経験とそれに続く経験を切断するために、継続的な「物語 narrative」が維持できない。消滅についての不安や、外部から侵入する出来事によって呑み込まれ、押しつぶされ、圧倒されることへの不安はしばしば、この感覚を伴うものである」[Giddens, 1991 = 2005, p.58] と。
- 6) この点はキャリア形成を考える私たちにとって考慮すべき問題が残っている。というのは、キャリア形成上で困難を抱えた人たちが強要されるのは、「耐えること」や「努力すること」だからである。もちろん、私たちの人間形成において一定程度「耐えること」や「努力すること」が不可欠であることはいうまでもない。しかし、何をどの程度「耐えること」や「努力すること」で困難を乗り越えられるのかが明示されなければ、それは過酷な要求といわざるをえないはずだが、ボルノーの説に従えば、時間離脱的で永遠であるがゆえに、終わりが見通せない「耐えること」や「努力すること」が要求されることになるというよい。それにもかかわらず、こうした非連続的契機は誰しにも降りかかるものであり、たいいてい人は「耐えること」や「努力すること」ができるために、それらをできないのは個人の責任であるとみなされがちなのである。この点は後に考えたい。
- 7) ここで指摘できる具体例は、移行期という事態がある人にとって困難として生起するのに、別の人には困難とはならないということである。単に学校から社会への移行だけでなく、学校から学校への移行——幼稚園から小学校への、小学校から中学校への、中学校から高等学校への進学、あるいは同一校種間での転校——も含むうる。
- 8) ボルノーもまたこの点を見通しており、非連続的契機が人間形成にとって避けがたく内在されているにもか

かわらず、それを乗り越えることができると約束されているわけではないと指摘している [Bollnow, 1959, p.33].

- 9) ここで示される後期近代社会は主として 1970 年代以降を指す。後期近代社会論としては、他にも、ベックの危機社会論を下敷きとしつつ、社会が包摂型社会から排除型社会へと変貌し、危機を保険統計的な態度で回避することが求められるようになったとするもの [Young, 1999=2007], などもあるが、基本的にはベックが指摘するように、個人化を基調としているとみてよいだろう。ただ、この点についてはあくまでも後期近代社会という大きな枠組みで示されているものであり、キャリア形成のプロセスが生じる、まさにローカルな場をどう捉えるのかという問題は残存する。その際には日本文化における人間観などが作用することが考えられるが、これらについては別稿において取り組みたい。
- 10) バッファが失われる背景やその結果生じる事態、それをいかに乗り越えるのかについては走井 [2010] を参照してもらいたいが、バッファも自己の責任において構築することが求められているとさえいえるはずである。
- 11) この点については、例えば、乾 [2010, pp.188-189] が「働きつけられている者たちの多くに見られる特徴は、一定規模の職場で同期入社と同僚が複数いることや、一定の研修期間が入社時にあることだった」と指摘し、「従来の標準的な移行ルートから外れる（外れざるをえない）者たちほど、その移行ルートの探索を自力で行わなければならないこと、そしてかたちのうえでは標準的ルートに乗れたかに見える者たちも含め、入職初期の孤立化が広がっていることである。そしてこうした孤立化は、自信や自尊感情、存在論的安心を脅かすことさえある」としている。こうした指摘は、佐藤・平塚 [2005, pp.53-56] などにもみられる。
- 12) 例えば、ギデンズ [1979=1985];レイヴラ [1991=1993] などを参照。
- 13) これを M.ポランニー [1966=2003] が示した「暗黙知」、あるいは、P.ブルデュー [1970=1991] によって独自の意味が付与された「ハビトゥス」と呼ぶことができるだろう。
- 14) この点について当事者の言葉によって傍証される。大高 [2011] は労協若者自立塾の受講生を対象とした聞き取り調査において「ズレ」た感覚を困難として捉え、「……自分の中でこだわりがどうしてもとれなくて、葛藤して」、「完全に自分の見方がおかしい」、などの言葉を示しているが、ここには身体感覚が弱体化し、自己完結的な思考に陥っている様子を看取できる。また、

キャリア形成支援の現場でよく聞かれる、「(部屋に入る)ドアをどのように開ければいいですか?」という問いにも身体感覚の喪失という事態が示されているが、この問いにはさらにドアを開ける際に正解となる開け方があるという認識が含まれることも私たちは注意しておく必要がある。

- 15) この点はE. S.リード [1996=2010, p.140] が「……どんなに高尚な間接経験でさえ、一次的経験の豊かで肥沃な土壌、世界における各所と各人がたどりつく世界の道程の意識という豊かな土壌に根ざしている」と指摘することからもその妥当性は検証される。
- 16) この身体感覚はむしろ受動性のうちに感得されるものであろう。例えば、中村 [1978, pp.35-53] は私たちが身体をもつがゆえに受動性を帯びざるをえない受動的な存在であるとしている。また、市川 [1993, p.12] は「われわれが在ることの不思議さの第一は、この出生にともなう偶然性にあります。気がついたらとり返しようもなく在ってしまっていた、という不条理さです」と述べている。
- 17) 例えば、J. レイヴら [1991=1993, p.7] は「知識や学習がそれぞれ関係的であること、意味が交渉 (negotiation) でつくられること」と述べているが、それを踏まえて、状況(文脈)に埋め込まれた行動と呼ぶことができるだろう。なお、この「語ること」については、monologueとしての語りとdialogueとしての語りの異同を踏まえたさらなる考察が必要であると考えているが、これは別の機会に論じることにした。
- 18) この「基本的信頼」はいうまでもなくE. H. エリクソン [1963²=1979, pp.317-322] 言及したことを踏まえている。ただ、この点については、発達心理学が明らかにしてきた自尊感情などの変容 [遠藤ほか, 1992] など、考慮しなければならぬ問題が多いことは否定できないが、本稿はキャリア形成の見通しを見出すことに力点を置いているため、可能性のある一つを示すということとしたい。
- 19) 自己の問題として考えるとはいっても、キャリア形成における困難に逢着する人たちの、それを受容できない理由を「意欲や対人関係能力、創造性など、人格や感情の深部、人間全体に及ぶ能力」などの「非認知的で非標準的な、感情操作能力とも呼ぶべきもの(いわゆる「人間力」)」 [本田, 2008, p.53] に求めているわけでない。本田 [2008, p.48-62] はこうした能力が個人の評価や地位配分の基準として重要化した社会状態を「ハイパー・メリトクラシー」と名づけているが、この問題点を繰り返す必要もないだろう。ここで明らかにしたいのは、従来の自己概念では十分に解明できない自己認識の変容プロセスである。

- 20) 上田 [2000, pp.34-35] は「私」に閉じた「私」を「自我」、「私は私である」といって、「私」が開かれた「私」を「自己」と呼んでいる。
- 21) ここで上田の説を採用するのは、自己が文脈においてあるということが鮮明にされているからにはほかならない。こうした文脈性はここまで言及してきたギデンズ、レイヴらにおいてもみられるものであるが、上田の説は自己の二重性を明確にしている点で自己のどこに問題が生じて困難となり、それがどうなれば受容できるのかがよりいっそう判然とするはずである。
- 22) このことは、例えば、『生徒指導提要』 [2010, p.162] が示すような学校教育において現在求められている「自尊感情」を高める指導や教育の在り方を捉え直す契機となる。確かに「自尊感情」の捉え方は多義的であるので、必ずしも自己執着的な方向への助長とはならないだろう。ただ、「自尊感情」を高めるということが自己執着の方向性ではなく、自己を支えるバッファを確保するという意味で捉えられる必要があるということもここでは指摘しておきたい。
- 23) ただし、ここでいう自己変容は必ずしも自己そのものの変容だけを意味しない。例えば、学校から社会への移行期において生起する自己の変容は自己が移行することによって他者や社会とのかかわりが変化することによって促されるものであるが、同時に他者や社会とのかかわりによってそこの生きづらさが生起することもある。これは自己そのものが変容したわけではないが、少なくとも自己が他者や社会とうまくかかわることができていない事態として受け取ることができる。このように自己変容は自己そのものの変容とともに、自己が相対的に変容する場合もここでは含んでいる。
- 24) 自己の変容が生起したとして、従来の自己認識と変容にともなって生じるはずの自己認識の間のズレを埋めようとする自己認識の変容がここで指示されている内容である。
- 25) 著者は2010年11月以降継続的にヒアリング調査やワークショップへのアクションリサーチを行ってきた。本論文以前にも十分な期間就労支援の現場に関与しているにもかかわらず、本論文にはその内容についてほとんど触れることができていない。これについては稿を改めて取り組みたい。

参考文献

- BECK, U. [1986=1998] *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne.* =ベック『危険社会—新しい近代への道』(東廉ほか訳, 法政大学出版局).
- BOLLNOW, O. F. [1959] *Existenzphilosophie und Pädagogik: Versuch über unsetige Formen der*

- Erziehung*, W. Kohlhammer Verlag.
- BOURDIEU, P. & J.-C. PASSERON [1970=1991] *Les Reproduction: éléments pour une théorie du système d'enseignement.* =ブルデュー・パスロン『再生産〔教育・文化・社会〕』（宮島喬訳、藤原書店）.
- 中央教育審議会 [2011] 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」.
- 遠藤辰雄・蘭千壽・井上祥治（編） [1992] 『セルフ・エスティームの心理学——自己価値の探求』.
- ERIKSON, E. H. [1963²=1979] *Childhood and Society.* =エリクソン『幼児期と社会』（仁科弥生訳、みすず書房）.
- GIBSON, J. J. [1979=1985] *The Ecological Approach to Visual Perception.* =ギブソン『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』（古崎敬ほか訳、サイエンス社）.
- GIDDENS, A. [1991=2005] *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age.* =ギデنز『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』（秋吉美都ほか訳、ハーベスト社）.
- 走井洋一 [2010] 「バッファとしての協同の再構築」, 『協同の発見』第221号（2010年10月）, 協同総合研究所, pp.110-114.
- [2011] 「生涯にわたって学習すること——教育哲学からみた「学習」」, 『東京家政大学研究紀要（1）人文社会科学』第51集, 東京家政大学, pp.27-35.
- 本田由紀 [2008] 『軋む社会——教育・仕事・若者の現在』, 双風舎.
- 市川浩 [1993] 『〈身〉の構造——身体論を超えて』, 講談社学術文庫, 講談社.
- 乾彰夫 [2010] 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち——個人化・アイデンティティ・コミュニティ』, 青木書店.
- LAVE, J. & E. WENGER [1991=1993] *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation.* =レイヴ, ウェンガー『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』（佐伯胖訳, 産業図書）.
- 文部科学省 [2010] 『生徒指導提要』, 教育図書.
- 大高研道 [2011] 「労働者協同組合における若者自立支援事業から見てくる「正統的周辺参加」の課題」『協同組合経営研究誌 にじ』秋号（No.635）, 社団法人JC総研, pp.84-100.
- POLANYI, M. [1966=2003] *The Tacit Dimension.* =ポラニー『暗黙知の次元』（高橋勇夫訳, ちくま学芸文庫, 筑摩書房）.
- REED, E. S. [1996=2010] *The Necessity of Experience.* =リード『経験のための戦い——情報の生態学から社会学へ』（菅野盾樹訳, 新曜社）.
- 佐藤洋作・平塚眞樹（編） [2005] 『ニート・フリーターと学力——未来への学力と日本の教育⑤』, 明石書店.
- 上田閑照 [2000] 『私とは何か』, 岩波新書, 岩波書店.
- YOUNG, J. [1999=2007] *The Exclusive Society.* =ヤング『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』（青木秀男ほか訳, 洛北出版）.
- 中村雄二郎 [1978] 『知の変貌——構造的知性のために』, 弘文堂.

付記

本発表は、2012（平成24）年度～2015（平成27）年度科学研究費補助金（24530969, 基盤研究（C）「ケイパビリティ概念の教育哲学的検討とそれに基づくキャリア形成支援プログラムの開発」, 研究代表者：走井洋一）の助成を受けたものである。

Summary

The results of this paper are summarized in the following three points. First, in career development accidental opportunities from the outside present themselves almost everyone. Secondly, to accept these accidental opportunities requires a transformation of self-awareness. This transformation consists of both a self-transformation in social relations and a transformation of self-awareness to accept the self-transformation. Thirdly, the transformation of self-awareness needs a re-construction of social relationships and the support of physical relationships.